

冷笑主義 社会を覆う？

この間の安倍政権の横暴、とりわけ安倍首相の国政「私物化」、取り巻き連中の付度を見ていると、腹の立つことばかりだ。でも国民の怒り、批判は広がりには欠ける。なぜだろうか。疑問に感じていたとき、朝日新聞 7 月 23 日朝刊に注目した。

リードから一「真実」は語られず、採決の強行は繰り返された。批判の先鋒である野党への支持も広がらない。通常国会が 22 日、閉会した。現代日本社会は冷笑主義に陥っていないだろうか。

「記憶の限りでは、ない」「刑事訴追の恐れがある」森友学園についての公文書改ざんや加計学園の獣医学部新設をめぐるいわゆる「モリカケ」疑惑の国会での追及に、国家権力の中核にいる幹部らは証言を拒否し、記録を突きつけられても記憶を理由に発言が二転三転した。

安倍晋三首相の国会答弁も物議を醸した。昨年 2 月、森友学園の国有地売却問題に自身や妻の昭恵氏が関与していた場合、「総理大臣も国会議員も辞める」と断言。この発言の後に財務省の公文書の改ざんや廃棄があった。ところが安倍首相は今年 5 月、自身の発言についてこう釈明した。「贈収賄では全くない、そういう文脈において一切関わっていない」贈収賄という文脈を自分で加え、「関与」の意味を狭めた。だが、前言を翻した「うそ」と追及した野党やメディアに対し、有権者からは「他に議論すべき問題があるのでは」という冷ややかな反応も目立った。

権力者の発言の揺れが許容される背景には何があるのか。百木漠・立命館大専門研究員（社会思想史）は、ベトナム戦争の戦況をめぐる、政府が国民を欺き続けていた 1960 年代の米国と重ねる。政治思想家ハンナ・アレントが当時、「伝統的なうそ」と「区別した「現代のうそ」という概念が今を読み解く助けになるという。

伝統的なうそは、まず正しい現実があることを前提としてそれを隠すことを言う。一方、現代のうそは、「何が現実なのか」という基準自体を破壊する。本来、公文書は「現実」を記録するためのものだ。ところが安倍首相の「関わっていたら辞める」発言の後に「『現実』であるはずの公文書が書き換えられ、その『うそ』の記述にあわせて『現実』自体が変えられていった」と百木さんは分析する。うそに合わせて現実が破壊されることが横行すると、政治の土台が覆され、市民はシニシズム（冷笑主義）に陥っていくという。「アレントは政治とは言葉の戦い＝議論と考えていた。議論は一つの現実に対する複数の見方がないと成立しない。政治の条件が破壊され、国会の議論自体がまともにも機能しなくなっている」と批判する。



一方、そもそも現在の日本政治にはもっと根深い「横着なうそ」がある、と指摘するのは五百旗頭薫・東京大教授（日本政治外交史）だ。「横着」と呼ぶのは、見る人が見れば分かるのに、まかり通ってしまう類いのうそだ。

社会保障費が増大を続け、国債発行を重ねる財政状況では将来は立ちゆきそうにない、と多くの人を感じている。だが、痛みを伴う抜本的な政策は先送りされる。そんな「横着のうそ」が横たわっている状況では、「そもそも誠実さのハードルが下がっていて、『モリカケ』も大した問題となり得ないのではないか」と指摘する、

「1強」のような権勢が政権にあると、「横着なうそ」で押し通されてしまう。真相が見えてきても、元から大して隠していないので打撃は少ない。批判はむなしくなって絶望は深まり、社会の分断は増すばかりだ。

(2018年7月29日)